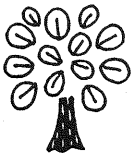
巻頭言

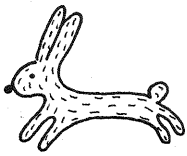
「子どもの最善の利益」について思う

阿部　和子

大学の改革が話題となって久しい。A短期大学で行われた、平成十七年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された授業実践の取り組みをみてみたい。それは、B山村に移動して展開される授業で、入学してすぐの五月に実施される。

学生は、自分の日常（ようやく慣れた大学生生活）を離れて、見知らぬ土地で見知らぬ村の人たちや、あまり親しくない友だちと八日間過ごすことになる。

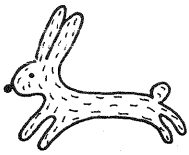




この実践のメインの活動は、グループに分かれ、与えられた材料だけを使って一つのものを限られた日数で完成させるというものである。課題を遂行するに当たって、学生たちは一様に、道具の使い方などに対する自分自身の力量と、知らない人と一緒にすることができるかどうかの「不安」をあげている。しかし、ここでの生活は、自分で動かなければ何も始まらない。たとえ、動かずにいようとしても、八日間という期間では動かずにはいられないという状況にある。

感想レポートでは、この移動教室でのさまざまな活動の中で、多くの学生がこの課題を「忘れられない経験」としてあげている。期限付きの課題は、躊躇することを許さず、とにかく、身体を動かし知恵を出し合いながら、試行錯誤するしかない。自分だけが動いてもうまくいかないことに気づいて、メンバー間に対話が始まり、対話を通して、お互いのイメージも明瞭になり、話し合いを重ねながら行動した結果が姿を現してくる。その出来具合が、行動の過程を具体的に見せてくれる。さらに、完成に近づいていくことが学生たちの意欲を刺激する。こうして、できあがったものが、グループの一体感の象徴となることで、「みんなが一つになった」という実感をもつことになり、忘れられない経験として位置づくことになるのだと思う。

この事例から、「自分の身体を使って相手（材料や、一緒に作る仲間）に働きかけること」、つまり、直接に経験することが学生たちの「ここの今」にリアリティをも



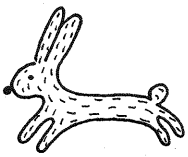
たせ、忘れられない経験となっていることが理解できる。

これは大学の授業実践であるが、人の生活の確かさは、自分であれこれ思い悩み、行動し修正しながら周囲に働きかけ・働きかけられることを再確認させられる。しかし、私たちの生活において、心揺さぶられながら生身の身体で、具体的に周囲にかかわり・かかわられることが少なくなってきていることが指摘されて久しい。そして、子どもの生活において、このような直接経験の重要性が叫ばれはしても、そのような取り組みが増えてきているかというと、必ずしもそうはいえない現状にある。

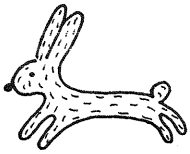
一方で「学力低下」がいわれ、これまでの義務教育のあり方が問われている。国をあげて、公立私立を問わずさまざまな取り組みが行われ、「新しいタイプの学校運営のあり方に関する実践研究(全国の七つの小学校が指定されている)」など、これからの学校教育のあり方が研究され始めている。

いまだに先が見えない中で、ある私立の小学校では、図書館の充実(蔵書三万冊)、三クラスが合同で授業を行えるスペース、給食は某有名ホテルに委託しているなどの環境を整えていたりする。

これらの取り組みは、子どもの発達を憂いて、現状を何とか打開して「子どもに子どもの生活を保障する(子どもの最善の利益)」ことを標榜しているのだとは思う。しかし、子どもの最善の利益とは何かを考えてのことだろうか。



私たち大人は、激変する世の中を一緒に生きるということを考えて、子どもに向かい合っているだろうか。現在をより善く生きながら、望ましい未来を作る主体としての子どもに向かい合っているだろうか。また、私たち大人は、われわれの生きている社会をどのように描き、その実現のために心を砕いているだろうか。子どもの将来を憂慮するということは、子どもとの生活の未来を含んだ現在を考えることだと思う。子どもは、抽象的な空間で生きているわけではなく、今、ここでの具体的なやり取りの中で生活し、そのやり取りを通して、その周囲を吸収し世界を広げていく。

大人自身のあり方も含めて、子どもと一緒に生活するということをもう一度、考え直してみたい。子どもが、実感をもってかかわれる環境をつくりたいと思う。自分自身の身体で、ものや人に触れ、悩み、苦しみ、喜び、悲しみのある生活を共にすることを実行したいと思う。子どもとの今を考え、環境を整え、そして、そこでの感情の揺れ動きにつきあうことは、骨の折れることでもある。冒頭に紹介した授業実践において、移動教室を成り立たせ、成果をあげているのは、この実践を支える多くの教員の願いや労力、村の人が学生に心を砕き、迎え入れる体制があってのことである。子どもの最善の利益とは何かをいつも問いながら、目の前の子どもとの生活に心を砕くことが重要であると考える。この延長線上での乳幼児の生活や、これからの義務教育のあり方の模索でありたいと思う。

（大妻女子大学）